

メッセージアウトライン

詩篇 91:1 ~16 「いと高き方の隠れ場」

[1] 「いと高き方の隠れ場に住む者は、全能者の陰に宿る」

「いと高き方」と「全能者」はともに主なる神のこと。「隠れ場に住む者」とは神との親密な交わりを絶えず持っている者。このような人は特別な祝福にあずかる。それが隠れ場に宿るといふこと。神と交わりを持つ者は神とともにあって安全であり、どんなわざわいも近づくことができない。「陰」とは驚にたとえられる神の翼の陰のこと。→申命記 32:11, 詩篇 61:4 その陰に宿るとは神の保護のもとにあるということであり、それ以上に安全な所はどこにもない。

[2] 「私は主に申し上げよう。『わが避け所、わがとりで、私の信頼するわが神』と」 「わが避け所」と告白するところに詩人と神との間に強い結びつきがあることを示す。神のもとに身を避け、守られている時、私たちは難攻不落の要塞の中にいることになるのである。私たちも心から「私の信頼するわが神」と告白する者でありたい。

[3] 「主は狩人のわなから、恐ろしい疫病から、あなたを救い出されるからである」 「狩人のわな」とは悪賢い敵の誘惑を意味する。「恐ろしい疫病」は罪という死に至る病、また耐えられないような人生の逆境、神のみこころを損なう人生の大失敗もある。しかし、主とともに歩み続けるならば、それらから守られ、救い出されるのである。「あなた」とは作者が自分自身に語りかけ、それによって自分に確信を与え、励まそうとしているのである。

[4] 「主は、ご自分の羽で、あなたをおおわれる。あなたはその翼の下に身を避ける。主の真実は、大盾であり、とりでである」 ひな鳥が母鳥の翼にすっぽりとおおわれ隠されるように、信仰者も神の保護のもとに守られる。主の「真実」というご性質は主により頼む民を守る「大盾」また「とりで」となる。

[5-6] 「あなたは夜の恐怖も恐れず、昼に飛び来る矢も恐れない。また、暗やみに歩き回る疫病も、真昼に荒らす滅びをも」 「夜」は暗やみに潜む危険を感じさせ、人を臆病にし、恐怖心を持たせる。「昼に飛び来る矢」は敵による卑劣な攻撃、巧妙な異端、突然の誘惑などを意味する。しかし、主のもとに身を避ける者はこれらのものが襲って来ても恐れる必要はないのである。6節も同じ内容の別の表現。

[7] 「千人が、あなたのかたわらに、万人が、あなたの右手に倒れても、それはあなたには、近づかない」この節の前半は神に背を向けて生きる人々に臨む最終的なさばき。後半は神に信頼し、神と交わる者は守られることを教えている。

[8] 「あなたはただ、それを目にし、悪者への報いを見るだけである」神に逆らう不信仰者への厳格な報いが示され、逆に信仰者はそれを免れるということにおいて神のいつくしみが示されている。→民数記 13~14 章（特に 14:37,38 節）

[9-10] 「それはあなたが私の避け所である主を、いと高き方を、あなたの住まいとしたからである。わざわいは、あなたにふりかからず、えやみも、あなたの天幕に近づかない」 「あなた」とは作者自身のことと考えられるので、自分で自分に語りかけて、主に信頼することの大切さを客観的に表そうとしている

と思われる。→他の例(詩篇 103:1~5)

主に信頼する者は主の保護のもとに置かれるのである。

[11-12]「まことに主は、あなたのために、御使いたちに命じて、すべての道で、あなたを守るようにされる。彼らは、その手で、あなたをささえ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにする」

これは主イエスがその公生涯の始めの時に荒野でサタンの誘惑に遭われ、その時にサタンが引用した個所でもある。→マタイ 4:6 これは主を信頼する者は守られるということを教えている個所であり、主を試みるようなことをしても守られるとは言っていない。

御使いたちの任務の一つは信仰者の守りである。→ヘブル 1:14 いつの日か主なる神のまえに立つ時、私たちは目に見えない御使いたちが私たちのためにしてくれた多くのことを知って驚くことになるだろう。

[13]「あなたは、獅子とコブラとを踏みつけ、若獅子と蛇とを踏みにじろう」前半と後半は同じ内容で並行しており、信仰者を襲うさまざまな敵のことを表現している。そこには強力な敵も悪知恵にたけた敵もいる。しかし、主により頼んで生きる信仰者はそれらの誘惑、挑戦、攻撃を踏みつけ、踏みにじることができ、最悪のものともしないで生きることができるのである。

[14]「彼がわたしを愛しているから、わたしは彼を助け出そう。彼がわたしの名を知っているから、わたしは彼を高く上げよう」

ここから 16 節まで主なる神ご自身のことばである。主がわざわざから救い出してくださるかどうかの決め手は、主に対する愛である。「私の名を知っている」とは主ご自身を知っているということを意味する。主はご自身を知っている者を危険や恐怖から解放し、低い所から高い所へと引き上げてくださり、平和と喜びのうちに生きるようにしてくださるのである。

[15]「彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に答えよう。わたしは苦しみのときに彼とともにいて、彼を救い彼に誉を与えよう」

信仰者が主に祈り、呼び求めれば、主は答えてくださる。私たちは祈りによってあらゆる良いものを受けることができる。また、主は厳しい試練の中にある信仰者たちを助けるためにあわれみと力をもっていつも近くにおられる。主は彼らの祈りに答えて、試練の中から救い出し、誉を与えてくださるお方なのである。このことを私たちは心から信じなければならない。

[16]「わたしは、彼を長いのちで満ち足らせ、私の救いを彼に見せよう」

主のみこころによって若くしてこの世を去る信仰者もあるが、一般的には主は信仰者の生涯を長寿で祝してくださる。→出エジプト 20:12、申命記 4:40,5:33,6:2,11:9、箴言 3:1~2

「わたしの救いを彼に見せよう」とは信仰者が長く生きれば生きるほど、主が様々な困難、患難、苦しみから救い出してくださることを見させてくださる、体験させてくださるという意味である。

主なる神を信頼し、そのもとに身を避け、そこに住む者はこのような豊かな祝福、恵み、守り、救い、誉が与えられる。それゆえ、私たちはますます主を愛し、主に信頼し、主の守りと、導きのもとに生き、この地上の生涯においてすばらしい主のみわざを見させていただく者になりたい。

この一年の守りと導き、祝福を心より感謝しつつ。